このパワーポイントは2018年12月16日のカパル設立記念大会・第１回研究大会冒頭に行った「設立趣意説明：運営方針・運営組織・今後の計画」を、口頭説明なしでも理解できるよう、またその後の変化や進展をも加味しつつ一部内容を改めたものである。（20190420）

カパルの運営方針・運営組織・来年時計画

加藤　剛

カパル世話人共同代表

インドネシア研究懇話会設立記念大会・第１回研究大会
於：京都大学稲盛財団記念会館；2018年12月16日（日）

「インドネシア研究会」設立発意までの経緯

- 切っ掛けは、2018年5月26日（土）に北九州市立大学で開催された東南アジア学会の会員総会での決議である。

  ⇒従来の年2回の研究大会を年1回にする内容を含む理事会提出の「学会活性化パッケージ」案が承認された。
- 東南アジア11カ国のうち8カ国については国別学会ないし研究会が存在し（後述）、また言語・文学が中心とはいえ実は「日本インドネシア学会」もすでに存在する。
- 東南アジア学会研究大会の年1回開催は、人文社会系インドネシア研究者、特に若手の発表機会の縮小を意味する。
- 加えて人文系・自然系を包摂するインドネシア関連研究会が存在しないことの問題や日本におけるインドネシア研究自体の存在感が低下しているとも感じていた。

⇒「インドネシア研究会」設立の必要性を考えるにいたる。

設立までの経過　1

- 6月初旬から中旬にかけて東南アジア学会でアクティブな中堅インドネシア研究者４人とシニア研究者１人に声を掛け、研究会設立世話人会を結成。
- 世話人会のメンバーは下の通り[以下敬称略]：
  太田淳・岡本正明・加藤剛・倉沢愛子・菅原由美・長津一史。
- たまたま6月30日に京都で研究会があり、世話人会の何人かが出席予定のことから、これに合わせて「インドネシア研究会」設立相談会を京都で開催することにした。
- 世話人会メンバー以外に相談会への出席を打診したのは、貞好康志・林田秀樹・北村由美・工藤裕子で、全員参加とはならなかったが、東京からSkype参加の長津を含めて相談会を開催した。

設立までの経過　2

- 相談会では、会の名称を「インドネシア研究懇話会」とすることに決め、学会費の徴収や学会誌の発行などは計画しないことにした。
- 他には、林田を中心に「懇話会メーリングリスト」の作成、岡本によるブログの立ち上げ、さらに研究大会の年内開催、Jafar Suryomenggoloに世話人会への参加依頼、設立記念講演会のテーマを「三世代が語る〈わたしのインドネシアとインドネシア研究〉」にすること等を決定した。
- 7月22日に“「インドネシア研究懇話会」設立のご案内”を東南アジア学会メーリングリストに流し、懇話会設立と12月16日に研究大会を京大稲盛財団記念館にて開催することを公表。
- 8月16日に同様の情報を、完成したばかりの懇話会メーリングリストでも流した。

設立後の経過

- 岡本正明を中心にブログ立ち上げ準備を開始。
- Jafar案でインドネシア語名称はK[=インドネシア語の発音はka]elompok Pemerhati dan Peneliti Indonesia di Jepang（日本のインドネシア研究者ならびにインドネシアに関心のある者の集い）に。
- 同じくJafar案により、上記青字を繋げ、略称を海洋国家インドネシアを象徴してKAPAL（船）とすることに決定。
- ブログ表紙を検討する過程で、KAPALを「日本とインドネシアにとっての海の重要性と両地域を繋ぐ船」と再解釈。
- 9月中旬、カパル・ブログ立ち上げ→カパル設立記念大会・第1回研究大会のアナウンスと研究発表募集開始。
- 10月14日の応募締切後、太田淳・長津一史・加藤剛に加え津田浩司・増原綾子・山口元樹により発表要旨の査読、前3者によりプログラム作成。11月中旬、合地幸子編集のプログラムと要旨集をブログにアップ。
- 以後の経過は、カパル・メーリングリストやブログにより発信（現在はカパル・ウェブサイトに掲載）しており省略。

インドネシア研究懇話会

Kelompok Pemerhati dan Peneliti Indonesia di Jepang

研究懇話会の略称は、インドネシア語名称の略称kapal（船）です。日本とインドネシアにとっての海の重要性と両地域を繋ぐ船を象徴しています。

© Osamu Monden

カパルの目的

- カパル（インドネシア研究懇話会）は会員制をとらないオープンな集まりとし、特定の専門分野や国境のうちに閉じこもることなく、広い意味でのインドネシア研究の発展を図り、参加者相互の協力ならびに親睦を促進することを目的とする。
- この目的を達成するために、研究大会を開催し、カパルのウェブサイトやメーリングリストなどを通じて情報の発信を行なう。
- 現時点では将来的な学会への再編は考えていない。
- 学会誌や会報等の刊行も計画していない。
- むしろ数多くある東南アジア関連学術誌などへの「他流試合」的な論文投稿が望ましいと考える。

カパルのイメージ

- カパルは、インドネシアに関心を持つ者がメーリングリストとウェブで繋がるルースでバーチャルなコミュニティである。
- カパルは東南アジアの〈ルースな構造の社会〉に通じる：
「東南アジア社会の人間関係、とくに農村社会のそれは、集団主義や〈士農工商〉的な厳格な身分性が導入可能なタイトな構造の社会というよりも、〈ルースな構造の社会〉〈ネットワーク社会〉等で形容されるように、主として二者間関係の連鎖と交差の集合として理解される。・・・」
- 〈ルースな構造の社会〉における共食の意義：
「・・・集団の外縁を規定し難い〈ルース〉な人間関係連鎖の編成・再編・再確認の機会として重要なのが、通過儀礼等に伴って開催される招待状を伴わない共食（kenduri, selamatanなど）とそれへの参加である。」

加藤剛、項目「東南アジア」中の【社会】『［新版］東南アジアを知る事典』（2008）p,533の一部を書き換えて転載。

カパル研究大会の位置づけ

- カパル研究大会は、カパルの人間関係連鎖の編成・再編・再確認の場、「共食」の場である。
- カパルの意義と活力は、カパルMLメンバーの研究大会への能動的な参加から生まれる。
- 学会に得てしてみられるような、「学会費」を払うだけで研究大会に姿を見せない「幽霊会員」は、財源として組織には有り難い存在だが、学会の活力には貢献しない。
- カパルの理想は「人間会員」をなるべく多くすること。
- 12月14日現在、ML登録者数は298名。今次の大会への事前参加登録者数は146名。50%に上る高い参加率！
- 〈ルースな構造の社会〉としてのカパルや研究大会が魅力的な場であるように運営関係者は努力していく。
- 大会会場のみなさん、ML登録者のみなさんも、姿のみえる「人間会員」として今後も研究大会に参加し、これを盛り立てていただけますよう、よろしくお願いします。

再び、カパルの目的

- カパルは会員制をとらないオープンな集まりとし、特定の専門分野や国境のうちに閉じこもることなく、広い意味でのインドネシア研究の発展を図り、参加者相互の協力ならびに親睦を促進することを目的とする。
- 「広い意味でのインドネシア研究」→カパルは「インドネシア」に閉じこもり、「インドネシア部族」Indonesia Tribeとなることを目的とはしない。
- 日本の他の地域研究分野に比べて、東南アジア研究には国別学会／研究会の並立が顕著であり（次の2つのスライドを比較参照）、国ごとの蛸壺化が危惧される。
- 冒頭で言及した本年5月に採択された東南アジア学会「学会活性化パッケージ」の問題のひとつは、東南アジア研究にみる国別「部族」とどのような関係を持つかを検討していないことで、カパルは「東南アジア」を意識しつつ活動を展開する。

東南アジア学会と日本の国別学会／研究会一覧（2018年末現在）

2018年、東南アジア学会以外の国別学会／研究会で100以上の研究発表がなされている

名　称	設立	最新研究大会、研究発表数、開催日数	経緯等
日本東南アジア学会	1966	2016年第98回、10発表、１シンポ（３発表）；17年第99回、５発表、３パネル（13報告）１年２回開催×【1.５日】；2019年より年1回【2 日】	2006年東南アジア史学会から東南アジア学会に改称
日本インドネシア学会	1969	2018年第49回、３スピーチ（BI）、９発表（うち３BI）【1.5日】	インドネシア語教育関係者中心+インドネシア文学等
日本ビルマ研究会	1986	2018年第28回研究会、８発表【1.５日】；初期隔年、阪神淡路大震災時一時期休止	前身は東外大ビルマ語研究室グループによる「日本におけるビルマ研究『報告書』」作成研究会（1983－86）
日本ベトナム研究者会議	1987	2018年第？回、１パネル（３報告）【１日】	シンポ／パネル形式が中心で2017年は休止の模様
フィリピン研究会全国フォーラム	1996	2018年第23回、24発表（うち英語12）【1.5日】	
日本タイ学会	1998	2018年第20回、２特別講演（６英語発表）、16発表、４書評【1.5 日】	前身は「タイセミナー」1990～1998
日本マレーシア学会	2009	2018年第27回大会、２発表、１シンポ（４報告）【１日】；昨年【1.5 日】	前身は「日本マレーシア研究会」1992～2009
日本カンボジア研究会	2009	2018年第12回、７発表【１日】	2007年から京大東南ア研で所内研究会等開催
日本ラオス研究会	2011	2016年第４回大会は現地JICAオフィスで開催。同年7月以降ブログの更新なし	現在現地でラオス文化研究会を開催している模様
インドネシア研究懇話会	2018	2018年第１回、講演会、30発表（うち２英語）、２ミニパネル（うち１英語）【1 日】	

日本に現存する他の地域学会（除く東アジア）等の例（不完全リスト）

学会名称	設立	国別等研究会など	設立	備考
日本オリエント学会	1954			
日本中東学会	1985			
		イラン研究会	1981？	
日本ナイル・エチオピア学会	1992			
日本アフリカ学会	1964			
		マダガスカル研究懇談会	1999	
ラテン・アメリカ政経学会	1964			
日本ポルトガル・ブラジル学会	1967			前身は1965年設立のポルトガル語教育者協会
日本ラテンアメリカ学会	1980			
日本・スペイン・ラテンアメリカ学会	1988			
		イベリア・ラテンアメリカ研究会	2001	ラテンアメリカ+イベリア半島；歴史学・考古学・人類学等
日本南アジア学会	1988			
		マハーラーシュトラ研究会	1998	一時休眠し2015年に機関誌と共に再開
		日本ブータン研究会（早大）	2011	2017年に日本ブータン学会
		日本ベンガルフォーラム	2016	
北東アジア学会	1994			
日本中央アジア学会	2004			前身は1999年開始の新疆研究者による「まつざきワークショップ」

「Indonesia Tribe」を乗り越えるために

- グローバル化し地域間関係が益々密接となる世界において、比較という視点は重要である。
- 研究大会では、インドネシアそのものに関わる発表以外に、自由発表、ミニパネル、パネルを問わず比較を考える発表を歓迎する。
- インドネシア内の比較、インドネシアと他所（東南アジア内外の国や地域）との比較の両方を歓迎する。
- 比較は、インドネシア研究者の関心を空間的・時間的・ディシプリン的に拡げてくれる豊かな可能性を孕む。
- 同時に比較は、他の地域を学ぶ研究者の関心をインドネシアに引きつける契機ともなりうる。
- ２人の発表者から成るミニパネルを設けた理由も、比較の枠組みを設定しやすいだろうと考えてのことである。

運営組織体制

- 12月2日夕方、東京での「関係者会合」（世話人会とスライド3、4、5で名の挙がった人たちで出席可能だったメンバー）で決定。
- 世話人会に代り新たに運営委員会を設置：「＊」は責任者

  代表：＊ 加藤剛（京大名誉教授）、倉沢愛子（慶大名誉教授）

  総務：＊ 菅原由美（大阪大）、山口元樹（東洋文庫）

  会計：＊ 林田秀樹（同志社大）、合地幸子（東洋大）

  大会プログラム担当：＊ 岡本正明（京大）、津田浩司（東大）、

  Jafar Suryomenggolo（政策研究大学院）

  大会会場担当：＊長津一史（東洋大）、太田淳（慶大）

  ブログ・情報担当：＊高地薫（神田外大）、見市建（早大）
- 明確な任期は定めないが、カパルの組織運営が順調であれば、１、２年のうちに「その後」を考える。
- なお、ウェブサイトのカテゴリー「運営委員会」にみるように、その後上記メンバーに加えて数名の運営委員を追加している。

情報プラットフォームとしてのカパル

- [カパルの]目的を達成するために、研究大会を開催し、カパルのブログ(現在はウェブサイト)やメーリングリスト[ML] などを通じて情報の発信を行なう。
- ブログをたんなる研究大会案内板とするのではなく、ML登録者間の情報発信・情報交換の場とする。具体的には、以下の投稿・情報欄の設置を検討する。
- **大会見聞記**:研究大会全体や特定セッション・発表についての感想・コメント。
- **カパルの本棚**:インドネシアに関係する本や論文についての紹介・感想。「旧作」でも自作の紹介でもよい。
- **カバル・アンギン**(風のたより):インドネシアやインドネシア研究関連等のニュース・情報。
- **カパル航海録**:運営委員会などによる重要決定事項等の掲載・記録保存。

2019年のカパル第２回研究大会

- 会場：東洋大学白山キャンパス
- 日程：2019年10月12（土）ないし10月13日（日）；発表希望申請が多いと予想される場合は両日開催も検討する。
- 発表形式：自由発表、ミニパネル、パネルディスカッションなど。
- 運営委員会がパネルないしシンポジウムを企画するかは今後検討する。
- 使用言語：日本語と英語。
- ７月中旬を目途に応募要領をウェブサイトにアップする。
- 研究大会の開催は、当面年１回、関東・関西交互の開催とし、春秋等の開催時期は関連学会の開催時期に配慮しつつ適宜検討する。
- 研究大会以外に、原則、当該年の研究大会開催地とは別の場所、別の季節に「特別研究会」の開催を検討する。

将来的な検討課題

- 情報プラットフォームに関連する投稿規定の検討。
- カパルは当面アダット（慣習法）に基づき運営するが、他の類似の研究会の例を参考にしつつ、将来的に会則のようなものが必要かを検討する。
- カパル運営委員会メンバーの新陳代謝とそのタイミングや実施の仕方。
- ウェブサイトと研究大会の多言語化。ウェブサイトの多言語化については、複数名のボランティアのリクルートが不可欠。
- サーバーレンタルの可能性⇒すでにレンタル済。
- 将来的には研究大会の関西・関東以外での開催の可能性を検討。

重ねて、今後ともカパルへのご支援、ご協力をよろしくお願いします。

ご清聴ありがとうございました